SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

フランス語と日本語：二つの言葉、二つの制度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 信孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008147

フランス語と日本語

——二つの言葉、二つの制度——

三浦信孝

私は昨年の十月にこの大学に赴任して参りまして第二外国語のフランス語を担当しておりますが、今日は、ふだん語学の授業ではお話しする機会のない「言葉」そのものについての個人的感想を、いくつか申し述べてみたいと思います。教養部公開講演会というたいそう立派な舞台を与えられましたが、私のお話は、言語学や言語思想に関する専門的・理論的なものではなく、ふとした偶然からフランス語を学ぶようになって以来時おり心に浮んだ印象や感想を、できるだけ整理して皆さんにお伝えしようとする試みにすぎません。そこでまず始めに、私がどういう言葉の経験を経てきたか、どうして言葉の問題に多少とも関心を抱くようになったか、その辺の事情からお話ししてみようと思います。

私は東北の盛岡という街に生れ育ち、啄木や賢治を生んだなかなか伝統のあるバンカラな高校を出たあと、大学へ入るため東京へ出てきました。大学では初め法律をやる予定だったのですが、どうも自分は法律の勉強に耐えられるほど勤勉でないことにたちまち気づき、学校がいやでグズグズ留年を重ねた挙句、六法全書を失くしたのをきっかけに法律はやめて仏文のほうに進路を変えました。当時は、政治と文学とか組織と個人とかもっともらしいことを考えていて、結局、社会科学（マルクス主義）の「理論信仰」から文学の「実感信仰」に宗旨変えしたようなわけですが、今から思えば何のことはない、いわゆるモラトリアム人間のはしりで、大学を終えて実社会に出るのが恐ろしく、将来の展望が茫漠として摑みどころのない文学を選んだのが真相に近いように思います。それで結局、フランスまで出かけて勉強することになった。留学というと体裁がいいのですが、私の場合は「外国に留まって学を修める」のではなく、留学と返り点を打ちまして「外国に出かけて学を留めた」ほうの口でして、デカルト流に気取って言えば、私はフランスでは「世界という書物を読む」ことに専心し、活字の書物のほうはトンと御無沙汰でした。

そんなわけで、ふり返ってみると、故郷の盛岡に十八年、東京

での学生時代が八年、パリに六年半暮したあと日本に復帰して四年目という大ざっぱな区分ができます。それぞれの時期にあって、私はいわば異なった言語環境のなかにいたわけであり、また一つの時期から次の時期への移行が、私の言語生活というか言語意識に大きな変動と混乱をもたらしてきました。

東京から西へ五百キロ行くと大阪です。東京から北へ同じく五百キロ行くと盛岡なのですが、東京―大阪間はもう十六・七年前から新幹線で三時間で結ばれているのに対し、東京―盛岡間は特急でもいまだに六時間かかります。つまり、それだけ日本でも東北地方は、幸か不幸か工業化・近代化からとり残されてきたわけです。最近でこそ都会生活の砂漠化や公害問題も手伝って地方を見直し地方に回帰する現象も目立ってきて、〝イワテケン〟がそうした傾向のシンボルに祭り上げられている観さえありますが、そのイワテケンも私の子供時代は「日本のチベット」などという随分失礼な呼ばれ方をしていたのです。

そういうわけで、当然のことながら言葉の面でも、私の地方ではいわゆる東北弁・ズーズー弁と馬鹿にされることもある訛の多い間の抜けた方言が話されています。もちろん私が育った時代は、ラジオ特にテレビの急速な普及もあって、われわれも標準語のアクセントに耳は馴れていたのですが、何せ標準語を話す機会がほとんどありませんから、たまに東京から転校してくる子がいると何となくハイカラであか抜けしてるように見え、トーキョー・トーキョーと囃したてたり冷やかしたりしたものです。

地方の県庁所在地とはいえ、それほど牧歌的といえば牧歌的な田舎ですから、大学受験で東京に出てきた時はまったくの驚きでした。上野駅から生まれて初めて地下鉄に乗ってみたら、下校時の小学生がみな生意気にも革靴に半ズボンという出で立ちなのにびっくりしました。盛岡では子供はみんな下駄――もちろん雨降りや雪の多い冬はゴム長をはきますが――だいたいいつも下駄で通していたわけで、高校でも革靴をはいて学校に来るのは軟派の不良学生と相場が決まっており、弊衣破帽、朴歯ばきの応援団から睨まれていました。

そんなわけで、東京へ出てきた当初はどうも怖気づいてしまって、努めて標準語を話そうとするのですがどうも自信がない。ボキャブラリーそのものが違っていたり、標準語の語彙を使ってもどうも東京の人とはアクセントが違うようだ、という具合で、自分が話しているのは確かに日本語なのですが、なにか外国語を話しているような感じなのです。時たま同じ高校の出身者と会っても、同郷なのだから久しぶりに故郷の言葉で話せばいいものを、中には意識してかしないでか標準語で通そうとする者もいて、どうせニセモノどうしなのに、と嫌な感じになることもありました。

こうして私は上京によって、いわば「他人の言葉」で意志の疎通をはからねばならないという決定的な隘路に足を踏み入れたわけで、大袈裟にいえば自分自身のアイデンティティー・自己同一性そのものが、他人の言葉たる標準語によってたえず脅かされる

ような状況を生きることになった。田舎の町で暮していた間は、ちょうど水の中を泳ぎまわる魚のように、どんな小さな意志や欲求もちょっとしたからだの自動的な動きによってやすやすと行為につながるように、透明な自由のなかでのびのびと、自分が話しているという事実にはほとんど意を用いることなしにごく自然に話せていたものが、急に何か喉につかえたように、人と話すのがいやいやおっくうになり怖くなってしまった。言葉はコミュニケーションの道具だとよく言いますが、人と意志を伝達するための道具であるはずの言葉が、逆にコミュニケーションを妨げる障害物になるという奇妙な逆転が、ここで起ったのです。

道具というものは、例えば釘を打ちつける金槌とか、刺身をつくる包丁とか、ほとんど人間のからだの延長かからだの一部になりきっていて、うまく道具を使いこなしているかぎり、道具の存在そのものには注意を払いません。金槌の頭がグラグラして釘がうまく打ちつけられないとか、包丁が鈍ってよく切れなくなってはじめて、道具そのものの存在がわれわれの関心をとらえるのです。道具というものは、目的に到達するための手段であって、正常にその機能が果される時は、われわれは目的の遂行に没頭していて、道具存在の物質性は意識にのぼってこない。だから、ノーマルに機能している道具は、それを使う人間にとってほとんど存在していないに等しい透明な存在なのです。それが一たん故障がおこると、道具は目的遂行に奉仕する手段であることを止め、その不透明な物質性を主張しはじめ、人間の意識を目的からそらして手段である道具そのものへと向かわせるのです。

こうした事態が、今から思えば、東京へ出てきた当時の私に、言葉のレベルで起ったのです。言葉は、物語や情報、意志や欲求や欲望を他人に伝える道具であり、総じて「意味」を運ぶ「うつわ」のようなものです。入れものである器のほうが気になりだすと、神経がそっちに集中してしまって、肝心の中味である意味の伝達は阻害されてしまう。言葉は透明な伝達の道具であることを止め、言葉そのものの物質性を主張して、言葉を使う人間の意識の上に不透明なザラザラした幕を張ってしまうです。

以上のような次第で、私の言葉にたいする感受性というか、道具としての言葉の底にある物質的抵抗感をはっきり自覚するようになったのは、盛岡から東京へ出てきた十代の終りに遡ることになります。ところが、これとまったく同じ事態がもう一度、舞台を変えて、しかもより大きな規模で起った。言うまでもなく、二十代の後半、留学でパリに出かけた時のことです。

フランスに渡るまでに大学である程度本格的にフランス語を勉強していましたから、本場で大いに実践してフランス語に磨きをかけるだけの下ごしらえはできていたはずなのですが、いざフランスに来てみると、どうも思惑どおりには事が運びません。第一に、それまで学校で習い自分で本を読んで多少は慣れ親しんでいた文学的といいますか書き言葉のフランス語と、実際にまわりの学生たちが話している学生言葉、街で普通のフランス人が話す日

常的フランス語のあいだには相当の開きがあって、話し言葉としてのフランス語がほとんど聞きとれない。

どこの国の言葉でも言えることでしょうが、特にフランス語では、社会・職業階級が上昇するほど話す言葉が書き言葉に近づく、いわば書くように話す能力を身につけているわけで、フランスに渡った早々でも、ソルボンヌの教授の講義とかラジオ・テレビで放送される大統領の演説は、内容的には高級でもさほど大きな困難なしにほぼ聞きとり理解できるのですが、俗語・隠語を交えた学生言葉、庶民言葉はまったく分らない。それですっかり怖気づいてしまった。サルトルの哲学論文は読めても街のカフェでタバコも買えない、と言ったらオーバーになりますが、それがあながち冗談でもないような気の滅入る状態なのです。あまりコンプレックスを深めないために、フランス人と話す機会は必要最低限にとどめ、努めてこれを避けるようにしました。

書き言葉と話し言葉の断絶といいますか、同じフランス語という一国語内部での言葉のレベル（niveaux de langue）の落差、これがフランスに行ってみて初めに思い知らされたポイントですが、それと同時に改めて驚かされたことは、フランス人の饒舌、よく言えば雄弁・能弁ぶりです。

頭の中にわくどんな小さな観念の芽、どんな微妙な感情の動きでも、なんの支障もなくすぐさま言葉になり、直接口をついて出てくる。思考や感情を言葉へと結びつける精密な回路がかなりの程度まで自動化され、各自のなかにビルトインされているのでしょう。フランス人がしゃべる言葉の大部分は、実は言いふるされた陳腐な慣用句（lieux communs）なのですが、そうした決まりきった言い方があらゆる状況に対応できるように幾通りにも用意されていて、それらを巧みに組み合わせ、それを各人なりのクセ（tic）で色づけしてペラペラ実によくしゃべる。まるで沈黙を恐れるように、この世界は隙間なく言葉で埋めつくされていなければならないとでもいうように、フランス人はよくしゃべります。

それで、初めのうちは私も物珍しさも手伝ってフランス人の集まるところへ出かけて行ったりしたのですが、とても話のスピードについていけない。こちらは会話は不慣れですから言葉がスポンテイニャスに浮んでこない。頭の中であらかじめ次に言うことを作文してから口を開くものですから、自分の意見を差しはさもうかなと思うときには、もう話題が別のところへ移っていて、話す機会を失ってしまいます。それでしょうことなしに黙りこくっていると、最初のうちこそサスガは東洋の哲人！などとお世辞を言ってくれたり、気分でも悪いのか？と心配してくれたりしますが、あまりいつまでも黙ってますと、アイツ馬鹿と違うか、ということになり、挙句の果てには、おもしろくもおかしくもない奴だと思われて、二度と声をかけてもくれません。

どうもフランス人にとっては、少なくとも他人と一緒にいるときは、たえず言葉を交わしていなければならないという不文律があり、話している状態がノーマルなのであって、沈黙すなわち言葉の不在はニュートラルなゼロの状態なのではなく、はっきりと

マイナス価値でしかないように思われます。話をしない無口な人間は、学校でも会社でも何かの集まりでもいいのですが、社会生活すなわち社交生活に参加しようとしない変り者と見なされる。腹が痛いか気分でも悪いか、知性に乏しいか、いずれにせよマイナスの人間と見なされてしまうのです。反対に、さまざまな人の集まり、会食のテーブルやサロンで、理路整然と、あるいは才智をきかせておもしろおかしく話のできる人は、〝ブリヤン〟（英語の〝ブリリアント〟「光彩を放つ」の意）と評され、皆から一目置かれるようです。

こうした「言葉の文明国」フランスへやってきた私は、そもそもフランス語がうまくしゃべれないところへもってきて、言葉と沈黙に関する価値観が正反対といっていいほど違うので、必要以上に自分がしゃべる言葉に気を使い、何かしゃべらねばという義務感からワザとらしい台詞を口にしたりする結果、言葉の自発性からはますます遠ざかり、人とのコミュニケーションのなかによりは孤独と沈黙のなかに自由と安堵感を見出すようにすらなりました。

いま、言葉と沈黙にたいする価値観が正反対だと申しましたが、日本では伝統的に口の立ちすぎる人はむしろ警戒され（「巧言令色少仁し」）、無言のうちに実力を発揮するタイプの方が信頼と尊敬を獲得するので、フランスの場合とはいい対照をなします。同じ大蔵省のエリート官僚出身でありながら、亡くなった大平さんのアーウーぶりとジスカール・デスタン前大統領のまるで幾何の問題を解くような理づめの語り口、あるいはお役人の書いた原稿から顔が上げられないと皮肉られた鈴木首相と、ドゴールを受け継ぐといわれる荘重なスタイルの雄弁家ミッテランとの何という違いでしょう。

ロラン・バルトという不幸にも去年事故死したフランスの批評家は、『記号の帝国』という一種の日本文化論のなかで、ヨーロッパ特にフランスの文化的伝統にあっては、「言葉によらないかぎりコミュニケーションはありえない」、すなわち全ては言葉によって表現できるという信仰、したがって言葉で表現されないものは無に等しいと見なす態度（「充満した言葉」のイデオロギー）が支配的であることを指摘しています。

このことはヴェルサイユ宮殿の内部を見ても分るでしょう。一面が金ピカに塗りたてられた上に、壁にはタピスリー、天井には天井画、床には絨緞、多くの立派な家具、と隙間なくびっしりと装飾がほどこされ、われわれ日本人には息がつまってしまう。何もない余白、無の空間、間（ま）というものが残されていないからです。よく引かれるように、例えば日本の山水画。これは白い紙の上に黒い墨で描かれていますが、黒の筆跡だけが存在していて白い余白は無に等しいのかといえばそうではなく、白は黒の不在として、図に対する地として、逆に強い印象と有機的意味を与えられるのです。言葉についても同じことが言えるでしょう。沈黙はフランス人にとって何もない無価値な空間に映るかもしれませんが、日本人にとって沈黙はまったくの無であるどころか、言葉を

成り立たせるために必要不可欠な間であり、それはしばしば発語された言葉以上に充溢した場として雄弁に語ることがあるのです。

こういった次第で、私はフランス人の間にいると自分の沈黙が重く意識にのしかかってきて、何かしゃべらなければと焦れば焦るほど、沈黙が固いカキの殻のように厚みを増して自分を閉じこめていくのを感じるのでした。仮に少し話せたとしても、もともと外国語ですからどうしても意を尽くした話はできない。フランス語であることを伝えようとするには、同じことでも幾つかの異なった表現をたたみかけて繰り返す必要があります。ところがこちらは沢山はものが言えないので、頭のなかで格言のように簡潔なフレーズを作り一・二度練習してから口に出す。自分では一つ一つの言葉に深い意味をこめたつもりでも、いざ口に出して言ってみると、どうも簡潔すぎて禅問答のようになってしまう。言葉に表現されたものしか表現と見なさないフランス人を前にして、自分の存在が、自分の吐き出した貧弱な言葉の推積に否応なく還元されてしまうのを見るのは、とてもつらいことです。

ところで、フランスに出かけるずっと前から気づいていたことですが、私の言葉に対する内向的・閉鎖的な態度にもかかわらず、言葉がごく自然に口をついて生まれ、他人とのコミュニケーションがいとも容易なものに思われることが、ごく稀にですが時々おこりうるのです。そのとき言葉は、もはやコミュニケーションを妨げる厚い壁ではなく、まるで軽やかな花粉のように私の口から吹き出されて宙に舞い、相手の上にこころよいエコーを呼び出すのです。私は自分の話すべきことを予め頭のなかで反復してから口に出すのではなく、まるで言葉が先に立って私を導き案内してくれるように、言葉は私が考えてもいなかった地点にまで連れていってくれるのです。

どうしてこのような言葉の自発性が生まれ、コミュニケーションが困難なく成立することが起こるのでしょうか？　私の考えでは、それは、私と私の話の相手とのあいだに成立しうる人間関係によるものだと思われます。私と私の相手とのあいだに眼には見えないが確かにその存在を感じとることができる「場」があって、その場の磁力の強弱に応じて、私から言葉が引き出されたり、逆に言葉を紡ぎ出すのに苦しんだりするのです。

私は一個の個体であり、私の相手もまた一個の個体であって、二つの個体のあいだには原理的にはのり超えがたい距離と断絶があります。私は相手にとって「他人」であり、私の相手は私にとって「他人」であり、二人はそれぞれの絶縁された個のうちに凝固して、通常は個が外界に向って開かれ、個の殻が他人に向って溶けて流れだすようなことは、まずめったにありません。そして「こんにちは」とか「ご機嫌いかが？」といったあたりさわりのない会話は、こうした絶縁された個体としての人間が互いに自分の殻を守ったまま、最低の社交的義務を果たすためだけに交わす符牒にすぎません。

逆に、人と楽しくおしゃべりして、一人でいては決して生まれなかったような考えが会話のなかから生まれるのを見るとき、私たちは軽い興奮と驚きをおぼえます。そのとき私たちは、自分を閉じこめていた個体の殻から抜け出し、私と相手がそれと知らずに作り出す「磁場」に深く支配されて、あたかも言葉は「私」からでも「あなた」からでもなく、まさに「私」でも「あなた」でもあるようなこの「場」そのものから生まれるかのように、自然に誕生するのです。私はもはや私の言葉の真の主人ではなく、私の個をこえて私とあなたの間に成立するこの「場」が、私から言葉を誘い出す、あるいは「私」を使って「場」が語るのです。哲学の言葉でいえば、おそらく「相互主観性」とか「間主観性」と呼ばれるであろうこの私でもあなたでもなく、かつ私でもあなたでもある空間は、もちろんごく稀にしか成立しない。また成立するとしても、ひとりひとり相手が違えばこの「場」のありようも異なり、同じ相手でも時と所によって、「場」のもつあの魔術的磁力のはたらきに強弱の差が出てくるのです。

その証拠には、まったく同じ考え、まったく同じ内容の話を、複数の異なった人々に、それぞれ異なった環境のもとで話してごらんなさい。頭のなかでは同一の観念だと思っていたことが、相手によってはうまく話せたり、考えていたことの半分も話せなかったり、あるいは話す気もおこらなかったりします。なかには、相手の共鳴によってこちらの考えが増幅されて、初めに頭に思い描いていた話の芽が大きくふくらみ、思いもかけない見事な花が咲き出るのを見て、話している当人が幸福な驚きにとらえられることが起るのです。

このことから次の二つのことが解ります。まず第一に、思考は言語に先立って頭のなかで独立に完成されていて、言葉はただその思考を翻訳し表現するための手段にすぎない、と考えるのは間違いで、思考は言葉と同時に生まれ、言葉と同時に実現されるということです。第二には、特に会話の場合、私の個的な願望や意志が言葉の主人なのではなく、話相手との微妙な人間関係によって私の言葉の発生は大きく条件づけられ、言葉は私の「意味志向」よりはむしろ私と私の相手とのあいだに成立する眼に見えない「場」のほうに従属する、ということです。

会話が生まれるためには、だから私と私の話相手とのあいだに、言葉の誕生を容易ならしめるようなある環境というか、ある関係の場が成立していなければならない。ところがそのような関係の場は、まさに言葉なしには作りえない。言葉なしには作りえない関係の場を前提にしなければ二人のあいだに言葉が生まれない、とするならば、これは卵が先か鶏が先かのどうどうめぐりになってしまいます。だから、言葉は、二人のあいだに相互主観的なコミュニケーションの場が成立するかもしれないという予感と期待に導かれつつ、初めはおずおずと切り出され、やがて会話が幸福な展開をみせるとき、言葉は一挙にこうした相互主観性の場を完成させるのだ、と言えるでしょう。

ところでこの第二の点、言葉によるコミュニケーションと、会話を成立させる人間関係の場との深い相関性は、どこの国の言葉にも見出されるはずのものですが、特にそれが日本語である場合、極端なまでの重要性を帯びてくる、と私には思われます。結論を先取りして言ってしまうなら、フランス語やおそらく他の西欧の国語においては、言葉が現実から相対的に自立した秩序を形づくっていて、言葉がそれを取り巻く人間関係の場から影響を受けることが比較的少ないのに対し、日本語の場合、言葉は、言葉が発せられる状況によってそのありようが基本的に規定されている、ということです。具体的に述べてみましょう。

日本人の場合、と一般化して不都合ならば少くとも私の場合、気の合った人と二人きりの親密な雰囲気がないとなかなか話ができません。よく知らない人とは話ができず、また多少知っている人でも話題を見つけるのに苦労して、なんとなく気まずい思いをすることがしばしばです。フランスにいた頃、知人の家に呼ばれて出かけていくと、よく十人も十五人も集めてのパーティだったりするのですが、もっと少人数の晩御飯の場合でも、会食の同じテーブルに初対面の人が三人や四人はいるものでした。すると途端に、先ほどお話しした会話の相互主観性の場をどこに見つけたらいいか分からなくなってしまう。というのは、複数の人間が集まると、私とそこに集まった一人一人との関係には当然、親疎の差が出てきます。しかし私はその中で一番親しい人、あるいはよく知っている人にだけ照準を合わせて話すわけにはいきません。彼のほうも、私以外の何人もの友だちとそれぞれ関係をもっているわけですから、私ひとりにだけかまけるわけにいかないのは当然です。こういう場合、多くの日本人は、いわゆる「甘え」の期待が裏切られたように感じ、居心地の悪さを味わったりするようです。

複数の人間が集まった場合、会話の相互主観的場を見つけるのが困難になると申しましたが、今度は逆に、複数の日本人のあいだに一人だけ外人が入った場合を考えてみましょう。これは、今日の日本では割と頻繁に出くわすケースなのですが、私はこういうケースで話をするのが嫌いです。日本人のあいだだけで成立していたある黙契が一外人の参加によって崩れ、異質な要素を組み込んだ新たな共同主観の場を作ることが極めてむずかしくなってしまうのです。この場合、会話の進行はだいたい二つに分かれるようで、日本人のそれぞれがその外国人との会話を求めて日本人相互間の会話が滞るか、またはその外国人を無視して日本人どうしだけで話をするか。いずれの場合も、どっかで気まずい思いは残るのです。

こうした現象は、日本人どうしの集まりにも見られる、と言うより実は日本人どうしの言語生活の中にこそ典型的な形で現われると言うべきなのです。学生のクラブのコンパや会社の同僚どうしなど資格の同質な人々の集まりの場合は、同じ場で生きてきた共通の経験が背後にありますから、一体感が生まれやすく共通の言葉での会話が成り立つのですが、先生と学生とか先輩と後輩と

いうように序列や資格に差がある人間が入り混じったり、あるいは友人を家に呼んでそこに家族が顔を出したりする場合、日本語では絶対に特定の二人のあいだでしか会話が成立しないのです。

というのは、日本語の人称代名詞が、自分を呼ぶ自称詞なら、わたし・わたくし・ぼく・おれ、相手を呼ぶ対称詞なら、あなた・きみ・お前などヨーロッパ系の言葉とは比較にならないほど沢山あって、特に相手を何と呼ぶかは、名前を呼び捨てにしていい人（部下・後輩）、名前をさんづけにする人、君づけにする人、また名前で呼んでは失礼で、社長とか部長とか先生とか地位名称で呼ぶべき人など非常に複雑になっていて、相手によって言葉の調子も、だ・です・でございます、などいろいろに変えなければならない。だから、自分を何と呼び、相手に何と呼びかけ、どういう口調で話すかは、ひとえに相手との人間関係によって決まってくるわけで、資格の違う人――資格というのは、目上・目下、大人・子供、男・女、身内・他人といった違いですが――資格の違う人が複数集まったときには、資格の違いが先生と学生というふうに一対ならいいのですが、資格の違いが二重にも三重にも重なってきたときは、いったい誰に照点をあてて話していいか分らなくなる。誰か特定の一人を念頭におかない限り、話題のみならず、話し方、口調、自分と相手の呼び方などが決定できない。だから日本語では、話し手と話し相手との人間関係がそっくりそのまま会話のレベルに反映され、会話の進行を条件づけてしまうがゆえに、言葉が言葉として現実から独立した世界を形づくりにくいのです。

つまり、相手によって自分のことを、私・ぼく・おれと呼び分ける――上司には「私」、気心の知れた友だちには「おれ」、家では奥さんには「ぼく」、子供に対しては「お父さんは」、その人が小学校の先生ならば生徒のまえでは自分を「先生は」というふうに、自分をさす言葉がめまぐるしく変ってくる。フランス語のように、誰のまえでも自分のことは Je（英語の I・ドイツ語の Ich）で通し、私が話している限り、私は Je として、いつも一定の主体として捉えられるのとは大きな違いです。フランス語では Je という人称代名詞は、ある会話の場で今まさに言葉を発している人が自分を指して言う符号であって、私が話している間は私が Je で私の相手は私から見て vous（英語の you）なのですが、相手が口を開くや、今度は相手の方が自分を Je と称し私は逆に vous と呼ばれることになる。実に当り前のことのように思われますが、こうした Je と vous の、I と you の交換性というか可逆性というか相称性（シメトリー）こそが、ヨーロッパ系の言語における人称代名詞の決定的な特質です。ところが日本語の場合、例えば夫婦間のやりとりを考えてみると、妻は自分を「わたし」、夫を「あなた」と呼ぶのに対し、夫は自分を「おれ」か「ぼく」、妻のことは「おまえ」か「きみ」で呼ぶのが普通であって、もし奥さんのことを「あなた」などと呼ぶ御主人がいたら、よほどの変り者ということになるでしょう。日本語では、自称詞と対称詞がそれぞれの人間関係によって固定化されており、人称

代名詞の互換性・相称性が根本的に欠如していのるです。

私はこれをよく次のように比喩でたとえることがあります。ヨーロッパ系言語における人称代名詞は、食卓で使うナイフやフォーク、お皿などに似てどれが誰のものというふうに決まっておらず、食事のたびに前回だれが使った食器か気にせず代る代る使うように人称代名調も順ぐりに使うことができるのに対し、日本語の自称詞や対称詞は、「夫婦茶わん」に代表されるように、茶わんやお椀、箸などが家族の誰のものか決まっていて相互交換性をもたないのに似ている。この自称詞この対称詞は家族のなかの誰が（に）使うか限定されていて、互いに可逆的ではないのです。

以上のような自称詞・対称詞を中心にした日本語の特殊性は、今から十年以上まえに鈴木孝夫という言語学者によって体系的に明らかにされ、日本社会の家族的構成原理との関連から統一的な説明が与えられており、関心のある方は岩波新書の『ことばと文化』という本をお読みになるといいでしょう。ついでに一言つけ加えておけば、鈴木孝夫の日本語における adress words の分析は、文化人類学者の中根千枝が行った日本社会を「タテ社会」として捉える有名な分析と領域の違いをこえて重なり合うものだ、と私は見ております。

ところで、相手が誰であろうと、話しているのが自分なら、いついかなる場合でも自分を Je, I と呼べるフランス語や英語に対し、相手次第で自分の呼び方を変える日本語の仕組みは、深いところで日本人の自我といいますか主体のありようと密接に関わっていると考えざるを得ません。会話の場面にあって、話し相手との具体的人間関係から独立に、自分を「語る主体」として言語的に規定できる場合と、相手との社会的位置関係のなかで相対的に自分を規定する場合では、自己というものの捉え方に本質的な違いが出てくるのは当然です。日本語では「誰が語るか」ではなく「誰に語るか」「誰と語るか」が重要で、言葉の主体は、いわば会話の場面に従属する従属関数なのです。この点について非常につっこんで考えた方に、フランス文学者で長いことフランスの大学で日本語や日本文化について教えられ、彼の地で客死された森有正という哲学者がいます。筑摩書房から全集が出ていますので、機会があったら読んでいただきたいと思うのですが、森有正は、結局のところ会話の相手である「あなた」が「わたし」のありようを支配し、その「あなた」の方も実は「あなたから見たあなた」に従属していて、どこにも「わたし」が独立して成立しない日本語の特質を、「日本語における二項方式」とか「日本語の二人称的性格」というふうに呼んで、これを天皇制の問題にまで結びつけて議論しております。これまた、私の考えでは、精神分析の領域で土居健郎が明らかにした日本人における「甘えの構造」（母子の融合的二項関係の社会的コード化）と密接な関係がありますが、ここでは指摘するだけに留めておきます。

次元はだいぶ低くなりますが、この点に関係すると思われる私自身の経験を二、三お話ししてみようと思います。私はフランス

滞在の最後のころ、先ほどの森先生が亡くなった丁度その年（一九七六）から森さんが教えていらしたパリ大学の東洋語学校というところで一年半ほど、フランスの学生に日本語を教えたことがあります。初めはフランス語を使って教えるのですが、三年生ぐらいになると日本語で教える授業も増えてきます。で、そうしたクラスでフランス人相手に日本語で話す場合、あるいは教室以外でも日本語のできるフランス人の友だちと日本語で話す場合に、相手が外国人だと、かなり日本語ができる人でも、やはりどうしても日本語の細かいニュアンスや日本語特有の発想や心理が分らないのではないか、という危惧が先に立って、自分の話す日本語をできるだけ分りやすくしようと努めるうちに、言葉の自発性というか自然さが失われてきて、自分で聞いても奇妙な日本語だなあ、と思うような日本語で話しているのに気づくことがありました。つまり、私と外国人の話し相手とのあいだに日本語で話して通じあえる共通の基盤が存在しないのではないか、という不安が私の主体をぐらつかせ、腰くだけの、極端な場合アクセントまでまるで外国人が話すような日本語で話しているのでした。これはあまり個人的なケースで一般化はできませんが、相互主観性の共同の場に支えられなければ言葉が自立できず、言葉の主体が話の相手の従属関数になってしまう一つの例ではないでしょうか。

逆に私は学生時代、日本で何人かのフランス人講師に習いましたが、生徒があまりフランス語が分らず反応が鈍くても、フランス人の先生は、やさしい言葉や構文を選んだり少しゆっくり話すなどの努力はしますが、決して相手のレベルに妥協することなく、あくまできちんとした模範的フランス語をくずさず話されていたように思います。

個人的経験から引き出したもう一つの例ですが、人間の言葉の行使のなかには、自分のことも相手のことも、自分と相手の関係についても全く意を用いることなしに「私は」と言える例外的なケースがあります。それは他人の言葉を通訳する場合です。特に会議における同時通訳の場合、通訳者は会議場に直接姿を見せることなく、奥まったブースの窓ごしに発言者を見おろしながら、他人の話す言葉を追いかけつつ、自分がしゃべっているのでもないのに「私は…」と言えるのです。それは一見、他人の台詞を自分の言葉のように語る役者の場合に似てますが、役者は自分でない人物の役柄を自分の肉体を使って演技し、舞台上のその肉体は観客の眼にさらされます。それに対し通訳者は、芝居でいえば黒衣的存在であり、通訳者自身の存在は見えないほど感じられないほどいいのです。私の翻訳がスムーズに流れている限り、私は誰にも何も言われる心配がない。しかもしばしば、私の翻訳をイヤホーンで聞いている人たちは、聞こえてくる声の主の顔も知らないのです。それでいて私はヌケヌケと「私は」と詐称できるのですから、こんなに心理的に楽な発話条件はありません。個体としての現実の私は他人の話のかげに隠れ消滅しながら「私は」と言えるのですから。

そんなわけで、私はフランスにいた間、フランス語の勉強だと

思ってよく通訳の仕事をしていたのですが、通訳の経験を通して気がついたことがもう一つあります。通訳の仕事は貿易・金融などビジネスから労働問題や政治、科学技術にわたる幅の広いものであり、フランス社会の多様な側面を観察し、かつフランス語が現実にどう使われているかを知るうえで貴重な経験だったと思います。それで慣れてきますと、「日本はエネルギー資源に乏しく、全石油消費量の九九パーセントを輸入に頼り、その七割強は中近東の産油国に依存している」などということは、比較的スラスラと言えるようになるわけです。ところが、友だちの集まりや異性との付きあいでの会話がそれだけ上手になるかというと決してそうではない。相変らずプライベートなレベルでの会話はうまくならないのです。

だから、語彙や言いまわしが豊富になり、通訳としてむずかしいことがスラスラ翻訳できても、自分自身が発話の主体となり相手との人間関係が直接からんでくる場面では、純粋な語学力だけでは会話は成立しないのです。文法的に正確な文が作れても、それだけでは実際の会話力にはつながらない。どういう場面でどういう言葉が有効な意味をもつかは、文化によってかなりの程度コード化されていて、そのコードから外れたことは、いくら語学的に正確でもコミュニケーションの機能を果たさないことがある。そのコードがなかなか飲みこめないのです。人間関係、発想や行動様式など言葉を取り巻く眼に見えない言語外的ファクターを支配している文化的コード（慣習の体系）があって、それが摑めないと、何をどう言えば「適切」なのか分らないのです。ちょっと問題を広げすぎたようですが、ここで乱暴な議論になるのを承知のうえである図式化を試みたいと思います。

人間が話す言葉を機能のうえで分類すると、あらゆる文は次の二つのタイプのいずれかに属することがわかります。一つは「これはペンです（This is a pen ; C'est un stylo.）」型、もう一つは「私はあなたを愛しています（I love you ; Je vous aime.）」型です。第一の型は、ここにペンがあるという事実を単に確認する文で、原則的には「あなた」も「私」も文の表面には出てこず、第三人称を主語にして事実を客観的に述べる「事実文」ないし「記述文」です。第二の型は「私」が「あなた」を愛しているというのですから、それは私の心理状態をただ記述しているのではなく、私のあなたに対する欲望を訴えあなたの心を揺り動かして、私とあなたの間になにか新しい関係を作りだそうとする文です。「私」が「あなた」に言葉をとおして働きかけ、二人の関係が現実的に問題になってくるこうした文を「関係文」と呼んでおきましょう。（「事実文／関係文」の呼称は十年ほど前に英語系の社会言語学者の比嘉正範が使っていたものを自由に借用したものである。またこの区別は、バンヴェニストのいわゆる récit と discours の区別やオースティンの「陳述文／遂行文」「事実確認的発話／行為遂行的発話」の区別に重ね合わせて考えることもできよう。）

先ほどの「日本はエネルギー資源に乏しく云々」は、言うまでもなく、第一の事実を記述する「事実文」のパターンに属します。「昔あるところにおじいさんとおばあさんがおりました」という昔話、一般に第三人称を中心にして物語られる古典的小説、歴史書、学術論文などはこの「事実文」に属します。もちろん事実文とて何らかのコミュニケーションである以上、それを語る人と聞く人、メッセージの送り手と受け手はいるのですが、このタイプの文では両者の関係が「私」と「あなた」という形で直接文のレベルに反映されません。したがって語学力さえあれば、いくらでも外国語で話せるたぐいのものなのです。それに対し、私があなたにものを頼む、命令する、何かを訴える、愛情を求める、許しを乞う、怒りをぶつける場合の文は、相手との関係を意識せずには話せない「関係文」であり、したがって発話の成立の条件として相互主観性の位相が問題になってき、言葉は言語外の心理的要因によって大きく左右されますし、文化的コードの支配が具体的に現われるのもこのタイプの文です。最近はだいぶ改善されてきてはいますが、従来の外国語教育は《This is a pen.》の延長線上にある事実文を読むことに重点がおかれ、そのため関係文をベースに展開されるパフォーマティヴな会話には、私たちは慣らされていません。

事実文と関係文の区別はどこの国の言葉にも一応認められるものだと思いますが、もう少しよく考えてみると、日本語では事実文が事実を客観的に記述する事実文としては成立せず、関係文の主観的な文脈のなかに組み込まれてしまうことが分ります。例えば日本語で《This is a pen.》という客観的事実を伝えるのに、話者が置かれた場面、特に話の相手との関係によって、「これはペンだ」「これはペンである」「これはペンです」「これはペンでございます」というように文の調子が変ってくる。ひどい場合には「すでに御承知と思いますし、私のような者が今さら申し上げるまでもありませんが、これはペンでございます」ということになる。客観的な事実を事実としてニュートラルに述べることが、日本語ではむずかしいのです。人間関係が事実を述べる文にまで侵入してきて、「事実文」が発話の状況から独立して存在しえないのです。

日本語にもとづいて独自の言語理論を打ち立てた時枝誠記という高名な言語学者がいますが、彼は言語表現が成立する条件として、主体・素材・場面の三つをあげています。ごく平たく言えば、誰が・何について・どういう状況において語るかということで、言葉には、それを語る「主体」と語るべき対象である「素材」と、話し手と聞き手を包んで会話の場を形づくる「場面」とがあるというわけです。そして、時枝は表現における場面の制約あるいは条件づけを非常に重視した。今日は暑いという同じ事実を表現の素材とする場合でも、表現の場面に応じて「暑いなあ」「暑いですね」「お暑うございます」というふうに主体が素材を言語化する様態に微妙な変化が生じるからです。

こうした表現の場面による制約は、日本語の敬語を考えるうえ

で重要な分析の視座を提供することになりますが、同時に日本語の文の構造を「詞」と「辞」との結合としてとらえる時枝理論を生み出します。つまり彼は、語には、ものごとを概念化・客体化して表わす「詞」と、客体世界を主観的にとらえて主体の判断・情緒・欲求を直接的に表わす「辞」の二種類があり、日本語においては、助詞・助動詞・感嘆詞など主観的表現である「辞」が、名詞・動詞・形容詞など客体の概念的表現である「詞」を包みこみ一つの文として統括すると考えました。この「辞」が「詞」を包み統括する日本語のいわゆる「風呂敷型統一形式」において、「場面」の制約は主観的表現である「辞」のレベルに集中的にあらわれます。「暑いなあ」「暑いですね」「お暑うございます」という先ほどの例を思い出して下さい。まさにこの点が、日本語においては事実文が事実文として成立しえず関係文的様相を呈してしまう最大のポイントだと思います。

これは例えば学問的な議論を進めるうえで大きな障害になります。仲間や先生は批判しにくいし、いったん言葉で批判するとなると、これは友好的な関係を破壊しても構わない位の覚悟が必要になってきます。だから、感情的にニュートラルな、論理のレベルでの論争がなかなか成立しない。フランス語でも、いろいろ相手に対する配慮や用心はもちろん必要ですが、言葉の仕組みそのものの中に現実の人間関係が入りこむ度合はるかに小さい。一般にヨーロッパ系の言語は、《This is a pen.》のように主語と述語を繋辞で結ぶ「天びん型」の文構造であり、さらに専門用語を使うならば deixis と呼ばれて語る主体の存在を表示する一連の言葉は「事実文」からはほぼ完全に消去できるのです。

それにフランス語でなら、相手が先生であろうと上役であろうと私は「je 相手は vous でいいわけですし、話し手と聞き手の立場が逆転すれば人称代名詞はそれに応じてシメトリカルに交換されるわけで、その点では日本語からは考えられないほど平等です。だから、場面からは相対的に独立した形で事実を事実としてニュートラルに主張できる。これは日本人にとっては大きな解放感を味わわせます。だいぶフランス語に慣れた日本人と話をすると、目上の人なのに平気で「あなた」と呼ぶ人がいます。日本では目上の人は「あなた」と呼んではいけないので、先生とか部長とかソーシャル・ステータスで呼ぶのが決まりです。話の相手のことを「あなた」つまり you や vous で呼んではいけないなどと聞いたら英国人やフランス人はびっくりするに違いありません。ハワイの日系人たちが日本人どうし日本語で話す場合、私やあなたの自称詞・対称詞、兄・弟など親族名称、時や場所の deixis の部分だけ英語の単語で代用する傾向があるそうですが、これらの要素が日本語表現における「場面」と密接に結びついたものばかりだというのは、その意味で興味深いことです。

相手が社会的にどんな立場の人であれ、ひとしなみに vous と呼べること、誰のまえでも自分を「je と呼べること、また相手が話しはじめるや相手が Je になり自分が vous に転換するということは、考えてみればたいへんな現実の抽象化なわけでして、い

ま詳しくは申せませんが、それはフランス語の一、二人称が実は三人称的なものによって媒介されることによって平等な相互交換性を獲得しているのだと考えられます。こうして言葉がもつ現実からの抽象化能力のゆえに、フランス語では「場面」に左右されずに事実を事実として述べることが可能になるのですが、このことは、事実文すら関係文の様相を呈してしまう日本語に対し、フランス語においては関係文すら事実文の客観的論理を支えにしている、というふうに言えるかもしれません。

フランス人には raconter des histoires といいまして、自分が経験し見聞したことを相手の興味を引くようにメリハリをつけておもしろく話をする技術をもっている人が多い。何でも一つのストーリーに仕立てて、いろんな場面で繰り返すことをいとわず、いわば相手が誰でも同じ話を上手に物語るのです。自分のことを話すときでも、週末にどこそこへ出かけて、その日の天気はどうで、途中でどういうことに出あって、どこで何を食べて、そのレストランはこうこうで、といった話をする場合、当然 "je" を主語にして話しているのですが、物語の登場人物としての「私」は、実は古典的小説では第三人称で表わされる主人公と同じ立場におかれるわけで、自分のことを他人に話すときには、自分に共感をもたない人にも興味を惹き起させるように、自分を客観的に客体化して話すよう習慣づけられている、そんな印象を私はもっています。相互主観的な場があるから話ができる日本人の場合に対し、フランス人は逆に言葉によってそうしたコミュニケーションの場をつくっていくのだ、と言ったら類型化が過ぎるでしょうか。西洋に伝統的なレトリック、修辞学は、利害の必ずしも一致しない他人に自分の考えを理解させるための説得術・雄弁術として、現代でもその有効性はいささかも失われていません。

他のヨーロッパ語の場合もそうでしょうが特にフランス語の場合、現実のものの世界を言葉のシステムによって厳密に細部にわたって分節化し、現実をすっぽり言葉の秩序によって再現代行しようという努力を、何世紀も積み重ねてきました。だから日本人だったら言葉にならない、言葉にしたくない微妙な感情のゆれにも名前が与えられ、言葉がつくる認識の網目のなかに現実は生けどられ、というか言葉が現実を裁断して分類・命名し、現実の世界にリファーしなくても表象の秩序がそれとして自立した体系をつくっています。それは、言葉によって表現されてはじめて物が存在する、という逆転にまで至っていると言えるかもしれません。

日本語において現実が言葉のレベルに直接介入する例として、よくオノマトペ（擬音語・擬態語）の多いことがあげられますが、フランス語ではオノマトペは非常に少ない。例えば宮沢賢治の童話の一節「そのとき風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました」この中の四つのオノマトペはフランス語に対応する言葉がありません。様態の副詞を工夫したり、比較を用いたりして分析的に説明的に描写する以外に方法はないのです。

オノマトペの例だけではとても説明しきれませんが、人称代名詞や事実文／関係文など以上さまざま述べてきたことから、フランス語はその抽象性・論理性・分析性のゆえに、現実から独立した、したがって人間関係の場面を能うかぎり捨象した表象のレベルを確立しているのですが、逆にそれと同じだけ、矛盾にみちた、論理的分析のとどかない、具体的な生きた現実との直接的接触を失っているとも言えるのです。十九世紀末に出たフランスの哲学者ベルグソンは、ほんらい分割できない時間の持続として生きられる直接的生の現実が言葉の合理的分節によって空間化されてしまうとして、いわば理性的言語組織による生の疎外を告発したのですが、言葉にならない世界、通常の言葉では名づけ得ぬもの、表現不可能なものをこそ詩的表現の中心に据えたサンボリスム（象徴主義）以来、今日ではますます激しく、フランスではフランスのデカルト的伝統そのものである合理的言語組織を抑圧的制度としてとらえこれを批判する潮流が大きくなってきています。

同様にわれわれは、西洋的ロゴスとは異質な原理で組織されているに違いないわれわれの日本語を、一度は「外国語」としてとらえ、その中に隠された眼に見えない「制度」を可視的なものにしていく努力が必要なのではないでしょうか。大学における外国語教育の乏しい存在理由の一つはおそらくそこにあり、皆さんが日本語について考えるうえで今日の私のつたない話が何かのヒントになれば幸いだと思います。

（一九七七年秋パリ——一九八一年秋静岡）